

阿波の地名キライの語源について

高田 豊輝

はじめに

阿波にはキライという地名が多くある。「好き・嫌い」の「嫌い」と語形・アクセントがたまたま同じなので、話題にのぼることが多い。高田(1985)で、このキライの語源を「切れ洗い」とする説を提唱したが、詳細を述べることはできなかった。そこで、本稿で改めて考察する。

1. 先行研究

1. 1 森重幸の研究

キライに関する先行研究でもっとも詳細なものは、以下の2論文である。

(1) 森重幸 1981.8 『喜来』地名考『郷土阿波研究会 第5集』

(2) 方言学会 森重幸・川島信夫・金沢浩生 1982.5 「地名『喜来』の考察」『郷土研究発表会紀要第28号(総合学術調査報告貞光町)』阿波学会 <http://www.library.tokushima-ec.ed.jp/digital/webkiyou/28/2821.html>による。但しインターネット上の地図は不鮮明。上記2論文は著者名を異にしているが、内容は地図等も含めて同一。

また、森重幸氏単独で、キライについて、少なくとも2回の口頭発表を行っている：1回目は1981年12月20日、徳島市中央公民館における阿波学会研究報告(口頭発表)、2回目は1983年の中四国国語学会(後者は岸江信介氏を通じて仙波光明氏の教示による)。1回目の口頭発表の内容は上記(1)(2)と同一、2回目の内容は未詳。

実質的には、上記2論文ともに、森重幸氏の単著と思われる。なお、(2)が収められている『郷土研究発表会紀要第28号(総合学術調査報告貞光町)』には貞光町に関する諸報告が掲載されているが、それと直接の関係はない。

(1)の発行団体「郷土阿波研究会」は未詳である。以下、上の(1)(2)をあわせて「森論文」と呼ぶ。

森論文の内容をまとめると以下の(a)～(e)のようである。

(a) 地名キライの数 キライは徳島県35地点、香川県3地点、愛媛・淡路島各1地点、他に類をみない。

(b) キライの漢字表記 徳島県で「喜来」が圧倒的。「木来」1地点。古文書には「寄来・崎来」も現れる。徳島県のは鎌倉時代に遡る地名である。

(c) キライの先行語源説 ①一般人の語源意識は「喜んで来た」「寄り集まった」のように字義から理解する場合がほとんど。②吉田茂樹説：村人が寄り合って開発したという「寄来」説。③萩沢明雄説：キライは山間溪谷の流域に分布し地形が岬に類似する。そして古文書の「崎来」の「崎」は山の突端を意味する。④笠井藍水説：「木羅井」説。木材を以て井堰を作ったもの。「羅」は網の意とも接尾語とも。

(d) 森氏のキライの語源説 「切れ合い」説。

(e) 森氏によるキライの語義 降雨出水の時、河川があふれて(=切れて)、旧河道と新河道のいずれにも分流し、再び本流に合流する(=合う)地形。

1. 2 小川豊の著作・『徳島新聞』の記事・高田豊輝『徳島の方言』の記述

森論文の後、以下の(3)～(6)の文献がある。

(3) 小川豊の一連の著作

(3-1) 小川豊 1983.2 『危険地帯がわかる地名』山海堂。(3-2) 小川豊 1986.11 『災害と地名』山海堂。(3-3) 小川豊 1989.11 『川を考える地名』山海堂。(3-4) 小川豊 1992.9 『宅地災害と地名』山海堂。

書籍によって内容の出入りがあるが、重複する部分も多いので、一連の著作をまとめて内容を紹介する。

(b) 小川氏の著作のキライの漢字表記：森論文にない「剣来」をも掲げる。

(d) 小川氏のキライの語源説：古語「霧らう（霧らむ）」に由来し、「霧や霞や陽炎の立つ所」の意。語源説の根拠：「阿波の古老も土佐中村の古老も期せずして、測量をしている私に『キライじゃけん、測量がしにくいじゃろう』と言ってくれた」。他に森論文掲載の諸説の一部を、先行諸説として掲げるが、それとなく否定している。

(e) 小川氏によるキライの語義：河川蛇行の内カーブ側。砂礫堆の低地。低地であるため浸水・冠水はまぬがれない。元の川に復する可能性が高い。

これについてコメントをする。

(b) 「剣来」という漢字表記の地名は、高田は未詳。

(d) 小川氏の一連の著作の、森論文との関係は未詳。

(e) 語義については、森説に類似しながらも異なっている。(d)の「阿波と土佐中村の古老」のことばについても、固有名詞ではなく、普通名詞としてのキライの用法と考えられる。

(4) 1982年頃の『徳島新聞』の記事

今、探し出せないのが残念だが、著者は上記(3)と同一かと思われ、内容もそれに準じる記事が、1982年頃の『徳島新聞』に掲載されたことがある。但し、新聞記事に掲載された古老のことばは少し異なっており、「ここは〇〇川のキライじゃけん…」という具体的な川（阿波の川だったと思う）の名があった。

(5) その他

出典未詳ながら、「きらきら光るから」というような説を何かで見たことがある。これも水や河川と関係があるらしいという点では、森・小川説と共通だが、「一般人の語源意識」の域を出ないものであろう。

(6) 高田豊輝 1985『徳島の方言』

高田豊輝 1985『徳島の方言』では、キライについて以下のように述べた。

「キライ（アクセントは中中中） 地名に多くあり、喜来と書く。河流の屈折蛇行などにより、河の内側に土砂が堆積してできた沖積地。語源は切れ洗い（氾濫流路）ではなかろうか。」

高田の語源説「語源は切れ洗い（氾濫流路）ではなかろうか」は印刷直前に気付いて付け加えたものである。タイプオフセット印刷だったために大幅な増補は行えず、最小限の字数で我慢せざるをえなかった。この説は、森論文に触発されたものである。また、(4)の新聞記事から、キライが川の付属物であるような印象を受けた。

高田(1985)で述べられなかった事柄を今、3点補っておく。

①「洗う」については、川の氾濫が起こったときに、阿波弁で「田植え後に、田んぼがアラワレテ苗が流れた」「道路がアラワレテ不通になった」のように使う、その「洗う」である。

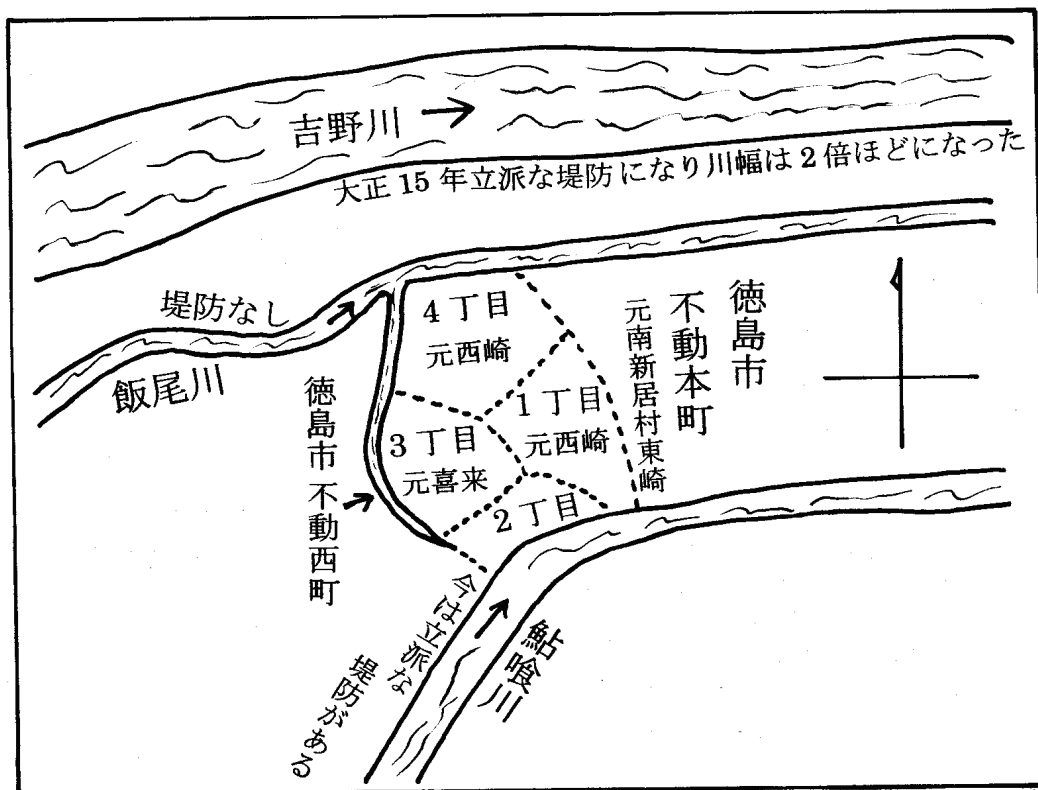
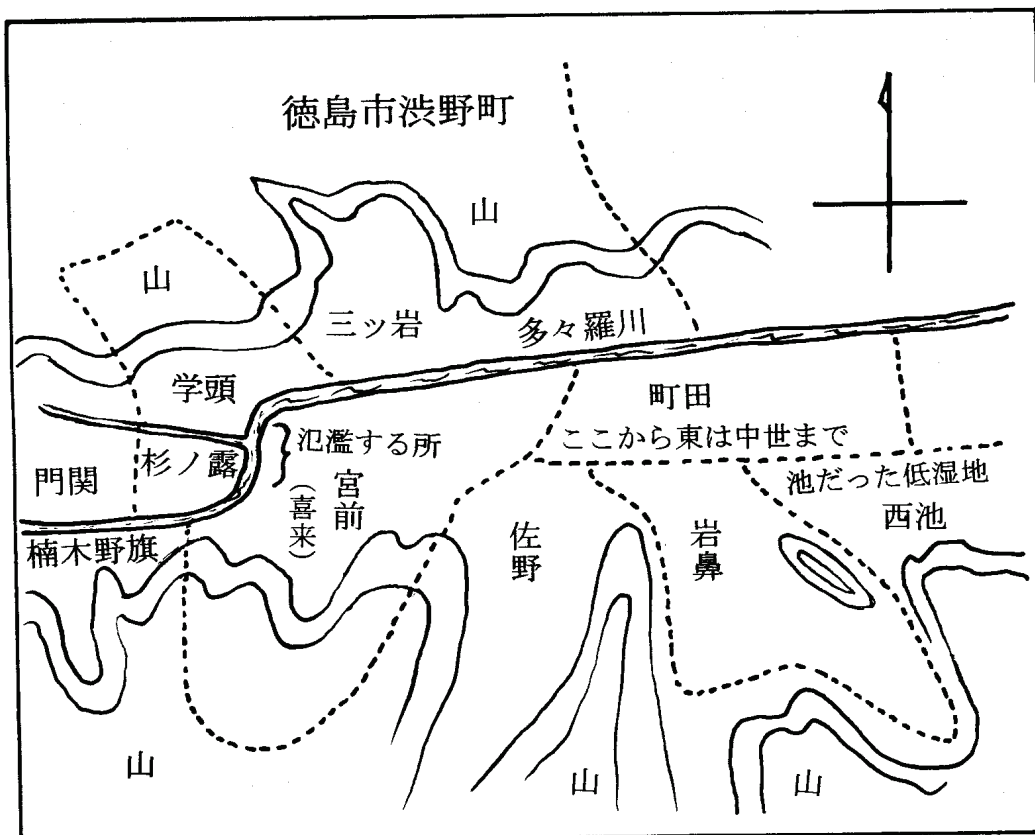
但し、キライの一般名詞としての用法はない。

②森論文があげているのは公的地名のみだが、他に、**俗称地名**としてのキライもある。以下2例を挙げる。

その1。徳島市渋野町宮前あたりをキライと呼ぶ（次頁上図〔高田作図〕を参照）。これも氾濫流路である。この渋野町のキライでは、宮前に隣接する佐野・岩鼻（氾濫流路ではない）もキライ地区に入っているが、これは人家がごく少ないためらしい。

その2。徳島市不動西町3丁目のほぼ全域も俗称でキライと言う（次頁下図〔高田作図〕を参照）。これは、元は正式地名か（現在唯一の名残は「不動公民館喜来分館」）。ここもかつて、洪水で民家が流れるようなことがあったという。原田春一 1966『鉛の兵士』（原田印刷出版）pp. 8-9によれば、「大正元年…とほうもない大洪水があった。…草葺の屋根の上に乗って助けを求めつつ濁流に流れていく人があった。これは喜来のT氏で運よく沖の州の高洲に打ち上げられ、九死に一生を得たとのことであった。」この時切れた堤防は不明だが、鮎喰川のものか。このキライは形状の変形著しく、元どのような地形だったかはっきりしない。現在でも、田んぼの形状が周辺と異なってお

り、キライのあたりは池の跡のようには見える。



③「河流の屈折蛇行などにより」としているのは、「河流の屈折蛇行」以外のものもあるからである。2. 1節参照。

なお、高田(1985)のアクセント表記は原則として中と下の2段階表記による。「中中中」は、高低2段階表記なら「高高高」(高起式無核型)。「はじめに」で触れたように、徳島市方言で、地名キライと「嫌い」は同じアクセントである。

2. キライの語義について

2. 1 地名としての語義について

地名としてのキライについて、森論文は、川の流路があふれて「切れ」、旧河道と新河道のいずれにも分流し、再び本流に「合流する(合う)」までの地形に由来するとしているが、小川・高田両著作は「再び本流に合流」に重きをおかず、「河川蛇行の内側などの氾濫原」とする。

森論文の説と、小川・高田両氏の説の、どちらが優れているであろうか。

森論文に添えられた資料のうち、少なくとも、資料6美馬郡美馬町[現美馬市]・資料7阿波郡市場町[現阿波市]・麻植郡山川町[現吉野川市山川町]の地図については、「切れてから合う」までの全体をさしているのではなく、むしろ「切れる」場所近くにキライがあり、氾濫原のより下流の、「合う」までの地区には別の地名が当てられているのである。さらに、上記麻植郡山川町[現吉野川市山川町]のものは、川田川が切れて、別の川である吉野川に流れ込んでいる。森説では元の川に戻らないといけなのだが、そうになっていない。

また、上記徳島市渋野町の通称地名のキライは、多々羅川(タタラガワ)があふれて、川状ではなく、放散して平野に広がっている状態である。

森論文資料8のデルタのキライ(鳴門市・北島町・松茂町)についても、デルタ地帯に存在する多くの「切れる」場所のあちこちにキライの名が付けられている。

規模が小さい場合などは、「切れ」てから元の川に「合う」ところまで全体をさす地名もあるが、少なくともそれは必須ではない。森論文では「切れてから合う」まで全体をさすものを原義としているのだが、むしろ上例のようなものがキライ本来の姿ではないだろうか。

そうだとすれば、森説よりも、小川・高田説が、地形上はすぐれている。そして「河川蛇行の内側」に限定せず、一般に川の流路があふれて「切れ」、氾濫する地域をさす、とするのが適切である。

2. 2 一般名詞としての語義について

小川氏の著作は、キライの一般名詞らしい用法を掲げている：「霧や霞や陽炎の立つ所」。

しかしながら、一般名詞のキライは『日本方言大辞典』や『高知県方言辞典』(土居重俊・浜田数義)にはみえず、どの程度一般的なものか不明である。またキラウ(霧が立ちこめる)という動詞形も現代方言には見えない。

河川の氾濫原の部分だけが「キライじゃけん、測量がしにくいじゃろう」というほどに霧が発生しやすい地形であるとは考えにくい。霧はむしろ山間部にもよく現れる。河川と特に関係ない地名に、美馬市つるぎ町一宇[イチウ]に剪宇[キリウ]がある。これはあるいは「霧」と関係する地名かもしれない。

3. キライの語源について

キライという名前が付けられた地名から明らかなように、河川に関わる語源をもつことは、ほぼ間違いない。これに該当する説のうち、森説(切れ合い)・小川説(きらい[霧])・高田説(切れ洗い)を比較してみよう。

小川説の「霧らい」は、上記のように、事象自体に問題があり、キラウ(霧がたちこめる)という動詞が現代方言に見えない点も問題である。残る森説・高田説のうち、森説の「切れ合い」は、上記のように「合い」の部分が

問題である。結局、高田説の「切れ洗い」は、語義についてはもっとも自然である。

音変化の面では、森説のほうが高田説より、語源と現在の語形との距離は近いが、高田説も不自然ではない。

アクセント面で、キレアイ下下中中・キレアライ下下中中中は、仮に発音すれば低く始まるアクセントを持っているが、キライ中中中は高く始まっている。語形変化の過程でアクセントも変化したと思われるが、これはともに不自然な変化ではない。但し、実例未詳ながら、どこかに下下中などで発音する地名キライが存在する可能性もある。

結局、語義の面から、高田説がもっとも有力だと考える。

なお、キレアイ・キレアライは、いずれも地名・一般名詞ともに用いられることはない。方言辞典の類にも見えない。

[注]本稿作成の過程は以下のようなものである。まず、高田の説を、高田の資料及び口頭説明をもとに、中井が取りまとめて下原稿を作成した。この下原稿について高田が校閲・新資料の増補を行った。校閲・新資料の増補の作業は数回に及び、数多くの補訂がなされた。